
白と赤と黒

幸咲満

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白と赤と黒

【Nコード】

N5191M

【作者名】

幸咲満

【あらすじ】

仲のいい双子の兄妹。表面下で崩れはじめていた日常に気づかなかったのは兄だけだった。気付かなかった兄が罪なのか、気付いてしまった妹が罪なのか。その答えは見つけられない。

武文には双子の妹がいた。妹の宮は幼いころから武文にくつついて離れず、武文はそんな妹が可愛くて仕方なかった。

二人が中学生にあがり、それでも仲の良いまま平和な日常がすぎていく中、少しずつ表面下で何かが壊れていつていることに武文は気づかなかった。

そんなある日のこと。

武文は「15歳になったら宮の願い事を聞いてあげる。」と、二人の15回目の誕生日が1週間後に迫った日の夜に言った。

唐突な言葉に宮は夕飯を食べていた手を止めた。

「どんな願いでも聞いてあげるよ。」

「でもその日は武文の誕生日でもあるよ？」

宮は急な兄の発言に首をかしげた。

いつもなら宮と同じように周りからもらう側である武文があげる側に立ちたいと思ったのは、このところ何故か元氣のない宮にプレゼントをして喜ばせたいからだだった。

「武文は優しいからなんでも願い事聞いてくれそうだね。」

そう言った宮は眉を寄せて苦しそうな表情をした。そのとき武文はどうしてそんな顔をするのだろう、どうして最近元氣がないのだろうとただただ不思議に思うだけだった。

彼は物事を考えるのにまだ少しばかり子供だったのだ。

だから気付かなかったのだ。

「願い事、考えておくね。」

宮の静かな声が武文の耳に残った。

誕生日が次の日に近づいた夕方。

武文は昼間とは違って変わって静まり返った学校にいた。委員会の仕事がよくやく終わり、帰宅しようと下駄箱に向かった。

怖いくらいに静かな校舎。

不思議なことに元気に駆け回る生徒の姿も、忙しそうに歩く教師の姿も見えなかった。

まるでこの世界に自分だけが取り残され感じがした。外に出ると校庭が薄暗いオレンジ色に染まっていた。

静かだった。

その中でふと武文は上からの視線を感じた。屋上を見上げると見慣れた姿があった。

振り向いた武文に気付いた宮は白くて細い腕をひらひらと振って見せた。それはいつもよりもずっと白くて、周りの夕暮れの色に染まることのない恐ろしい純白に感じられた。

宮の左手には白い紙が見えて、その足元にはダンボールが置かれていた。それは何かの形に折られていて、武文は一生懸命目を凝らしてみたがはつきりとは見えない。

遠くからでもわかるのは彼女のいつもの笑顔で、ようやくわかった左手にあるものは白い紙飛行機だった。

わずかに宮の口が動いた。

ごめんね

そんなふうに口が動いた気がした。空気を振動して小さな音は武文の耳に静かに入りこんだ。

それと同時に手から飛行機が飛び立った。

1つの紙飛行機がふわりと夕方の風にのり、ふらふらと寄り道をしながら武文の方へと下降する。その光景があまりにも非日常すぎて、武文はぼつと突っ立ったまま瞬きするのも忘れて見つめていた。1つ目の飛行機が着地する前にダンボール箱がひっくり返されて、中に入っていたのだろう何十個もの紙飛行機が解き放たれた。いっせいに宙を舞うたくさんの紙飛行機は視界を遮った。

白い世界で、ちらちらと時折夕暮れ色のグラウンドと校舎が見えるだけ。

そしてそのちらちらと紙飛行機が見える武文の視界に宮が落ちていくのがうつった。

それはあまりにも一瞬のことで、確認することはできなかったけれど、すべての紙飛行機が土の上に着地したとき、屋上には宮の姿がなかった。

あるのは空の段ボール箱だけだった。

何が起こったのか、今の状況を把握しきれない武文は地面の白い紙飛行機の1つをとってそれを広げた。

そこには見慣れた几帳面な文字が綺麗に並んでいた。

「今日は私がいなくなる日。

明日は私が生まれて15年目。

武文、好きだよ。」

武文は息をのみこんだ。

そして、また、別の紙飛行機を広げた。

「知っている。

私が武文を好きになっではいけないこと。

だから」

武文の紙飛行機を広げる動作が焦りを交えた。

「15歳になったら私の願い事を聞いてくれるって言ってた。

私の願いは武文と一緒にになれること。」

武文は真っ白になった頭に小さな文字を淡々と流し込んだ。

「我慢が出来ないくらい

これ以上隠せないくらい

あなたを好きになってしまった。」

愛の言葉に乗せた紙飛行機が武文の手によって広げられる。

「あなたはやさしいから

私の願いをかなえてくれる。

でもそれは

してはいけないこと。」

武文は飛行機を拾いながら屋上の真下の花壇へ足を進めた。

「15歳になつてはいけない。」

ああ、俺はどうして気付かなかったのだらうと武文の頭に黒いシミが広がっていく。

「好きだから、

あなたを守りたいから

私は14歳のままでいます」

白い紙飛行機が武文の心に少しずつ黒いシミをつけていく。

「好きだから」

「武文のことが好きだから」

ようやくたどり着いた花壇には宮の小さな身体が横たわっていた。

武文は動くことない宮の身体をじっと見つめた。

白い紙飛行機とは正反対の宮の赤く染まった身体は武文の目に焼きついた。

気付かなかった。

武文は宮の苦しそうな表情を思い出した。

気付かなかった。

武文は宮の身体を抱き寄せた。

「ごめん。」

それは一生分の「ごめん」だった。

残ったのは宮の赤い身体と、愛の言葉が並べられた沢山の白い紙飛行機と、武文の心の中の黒いシミだけだった。

（後書き）

それは救いようのない話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5191m/>

白と赤と黒

2010年10月28日07時17分発行